

ISO研究部会「ISOの真髄を發揮させるには」

1. 現場では軽微なミス・ロスが日常化する

(1) ミス・ロスは軽微なほど見逃される

ミス・ロスが軽微な場合・・・ミス・ロスが軽微な場合、費用負担を感じないため見逃されることが多い。
軽微なミス・ロスが連続・・・軽微なミス・ロスのため見逃している結果、連続して発生しても気が付かない。
軽微なミス・ロスの日常化・・・ミス・ロスが日常化するため、ミス・ロスが通常の施工行為として感じてしまう。

(2) 軽微なミス・ロスの標準化

避けられないミス・ロス・・・人間の通常の行為としてミス・ロスが発生し、避けることができない場合がある。
ミス・ロスのリズム・・・軽微なミス・ロスは、一定のリズムで発生する機会が多く日常化するのである。
標準化されたミス・ロス・・・実際の施工に当って一定量のミス・ロス見込むことを標準ミス・ロスという。

2. 軽微なミス・ロスの防御策

(1) 軽微なミス・ロスの認識

軽微なミス・ロスの認識・・・人間はミス・ロスを犯すもの、ミス・ロスは当然発生していると認識すること。
軽微なミス・ロスの記録・・・軽微なミス・ロスの記録がなければ、ミス・ロスの許容範囲の標準化ができない。
ミス・ロスの許容範囲・・・ミス・ロスの発生することを前提にして、許容範囲の検討が必要となる。

(2) 軽微なミス・ロスはマニュアルで防ぐ

ミス・ロスの予防策・・・日常化するミス・ロスを防ぐ方法は、日常の作業を標準化する以外に方法はない。
作業標準化の記録・・・作業標準化を文章化したものがマニュアルで、マニュアルがISOの基本となる。
ミス・ロスの許容範囲・・・ミス・ロスの許容範囲もマニュアルやISOの中で規定することができる。

3. ミスや事故の対応策

(1) マニュアル管理の手法

日常化する事故の予防策・・・日常化するミス・ロスや事故は、標準化したマニュアル管理が威力発揮する。
マニュアルの進化・・・マニュアルによる作業標準は、現場の施工実践を通じて日常進化する。
日常進化を内包するもの・・・現場の施工実践を通じて日常進化するシステムがISOの真髄である。
ISOは企業文化・・・ISOは企業独自で進化を始め、企業文化となるから他社が真似できない。

(2) 監督の段階確認を検査記録の確認へ

監督者の立会い段階確認・・・監督者による現場での立会いによる段階確認は、施工現場の大きなロスとなる。
施工現場の最適管理・・・ISOの検査記録の利用で、現場は最適な工程管理を継続することが可能になる。

(3) 例外管理の手法

突発事故の対応策・・・通常の施工管理はマニュアル管理で行い、異常事態は例外管理で対応する。
例外管理もマニュアル・・・異常事態の発生を迅速に修復するには、修復マニュアルと訓練が必要である。

4. 統合管理の必要性

ミス・ロスは頻発するとコストがかかる。大型ミスは事故につながる。結果的にミス・ロスや事故等の防御策としての安全管理が必要となる。事故は工期延長にもなり納期に影響する。このように品質管理、安全管理、工程管理、原価管理は一体化しているものであって、本来統合管理しなければ機能しないのである。したがって、ISOは統括されるシステムの一部として考えなければならない。